

協伸商会穀物レポート [KKR] Vol. 065

(2023/24年度 USDA米国農務省 12月8日発表)

[ハイライト]

① 世界の穀物需給は順調な生産に支えられ安定、市場価格は大幅下落。ただ実質在庫率は低く注意が必要

この一年を振り返った世界穀物市場は、昨年2月のロシアのUKR侵攻に端を発した歴史的な暴騰局面から全体的には落ち着き、1月以降総じて下降トレンドを辿って現在に至っている。具体的な前年同期比価格動向は下記に示す通り、小麦⇒\$5.77(\$1.6安)、コーン⇒\$4.65(\$1.7安)、大豆⇒\$13.25(\$1.14安)と下落。また侵攻時の小麦(\$14)コーン(\$8)価格暴騰と比べれば小麦/コーンは約6割下落。大豆は\$17.2⇒約\$4=2割下落。ただ中国除く在庫率は低く注意が必要。

② 一方、コメは市場規模拡大するなか異常気象/輸出規制等により市場価格高騰、アジア中心の市場構造に変化が...

世界のコメ市場はその生産/消費の約9割がアジアに集中しているが、市場規模は00年3.9億ト⇒23年5.2億トとこの20年余りで約3割増、貿易量も23百万ト⇒52百万トと大幅に拡大。主産地は中国1.5/インド1.3億ト+バングラ/インドネシア/ベトナム等が3千万ト前後と続くが、ロシア侵攻による中東等での需要増/インドの早魃/東南アジアのハリケーン被害等により最大輸出国インドは9月輸出規制を開始。市場価格は\$646/ト(タイFOB輸出価格)と前年12月(\$474)比\$172高、36%高騰。

③ ロシアの穀物生産/輸出は歴史的な高水準、ウクライナは苦戦しつつも輸出増加し善戦

ロシアの小麦/コーンの生産/輸出数量見通しは別表の通り、昨年に引き続き好調で史上最高レベルを維持。一方、UKR穀物の生産/輸出見通しは小麦23/13、コーン31/21百万トと徐々に回復しているがロシア侵攻前比ではまだ30%程度減少。7月にロシアが離脱した「黒海回廊」についてUKRは11/16黒海回廊の主導権をロシアから奪還したと発表、ルーマニア沖の新ルートでIMO(国際海事機関)に通報した。10月輸出数量は128万トと回廊利用期間中144万トと比べ10%程度の減少に留まっている。

1. 世界穀物需要の概要(大豆除く)

① 生産量:	2,803百万ト (前年比1.9%)	増 ↑、前月比0.1%	増 ↑)
② 消費量:	2,810百万ト (前年比1.5%)	増 ↑、前月比0.2%	増 ↑)
③ 貿易量:	500百万ト (前年比0.8%)	増 ↑、前月比0.7%	増 ↑)

2. 小麦

① 生産量:	783百万ト (前年比0.8%)	減 ↓、前月比0.1%	増 ↑)
② 消費量:	795百万ト (前年比0.3%)	増 ↑、前月比0.2%	増 ↑)
③ 輸出量:	207百万ト (前年比6.0%)	減 ↓、前月比1.1%	増 ↑)
⑤ 在庫量:	258百万ト (前年比4.3%)	減 ↓、前月比0.2%	減 ↓) / (在庫率 32%) うち中国134百万ト、占有率52%
④ 価格:	<u>\$5.77/Bu</u> (前年\$7.37/Bu / 前月\$5.73/Bu) と前月比\$0.04 上昇。		
⑤ 概況:	世界生産量は、前月比豪州/CAN等で微増となったが前年比では約6百万トの減少見通し。逆に消費量はEU/中国等での需要増により前年比2百万トの増加。輸出は2億ト維持。在庫は前年比1千万ト減。価格は供給潤沢の為前年比\$1.6下落。		

3. とうもろこし

① 生産量:	1,222百万ト (前年比5.6%)	増 ↑、前月比0.1%	増 ↑)
② 消費量:	1,207百万ト (前年比3.4%)	増 ↑、前月比0.2%	増 ↑)
③ 輸出量:	201百万ト (前年比11.3%)	増 ↑、前月比0.9%	増 ↑)
④ 在庫量:	315百万ト (前年比5.0%)	増 ↑、前月比0.1%	増 ↑) / (在庫率 26%) うち中国202百万ト、占有率64%
⑤ 価格:	<u>\$4.65/Bu</u> (前年\$6.35/Bu / 前月\$4.77/Bu) と前月比\$0.12 下落。		
⑥ 概況:	世界生産量は、前月比UKR/EU/ロシア等で微増、前年比米国39百万ト増回復/全体では約7千万ト増産となり12億ト大きく上回り史上最高見通し。輸出量は2億ト維持しているが消費量が生産増に追いつかず期末在庫量は315百万トと前年比約2千万ト増と重い。価格はこの状況を受け8月以降\$5を切り\$4台半ばで低迷、現状前年比\$1.7安となっている。		

4. 大豆

① 生産量:	399百万ト (前年比6.5%)	増 ↑、前月比0.4%	減 ↓)
② 消費量:	384百万ト (前年比5.4%)	増 ↑、前月比0.1%	増 ↑)
③ 輸出量:	170百万ト (前年比0.5%)	減 ↓、前月比1.2%	増 ↑)
④ 在庫量:	114百万ト (前年比12.1%)	増 ↑、前月比0.3%	減 ↓) / (在庫率 30%) うちBRA38/ARG25百万ト
⑤ 価格:	<u>\$13.25/Bu</u> (前年\$14.39/Bu / 前月\$13.28/Bu) と前月比\$0.03 下落。		
⑥ 概況:	世界生産量は、BRAマトグロッソ州での高温乾燥により前月比2百万ト減産となったが史上最高生産見通しは変わらず。消費量は中国輸入量が1億ト超える見通しで好調。在庫は生産が消費を大きく上回り増加しているが、価格は\$13台で堅調。		

世界の穀物・大豆等の需給

2023年12月8日
米国農務省発表： 単位 1 0 0 万トン

主要穀物世界の需給							
			生産量	総供給量	貿易量	総使用量	期末在庫量
全穀物	2020/21		2,795	3,590	513	2,797	793
	2021/22		2,750	3,543	496	2,769	774
	2022/23	11月	2,799	3,572	496	2,805	767
	2023/24	12月	2,803	3,577	500	2,810	768
小麦	2020/21		780	1,064	203	792	272
	2021/22		790	1,062	220	792	270
	2022/23	11月	782	1,052	205	793	259
	2023/24	12月	783	1,053	207	795	258
粗粒穀物 (とうもろこし等) 注1	2020/21		1,502	1,825	254	1,487	338
	2021/22		1,447	1,785	221	1,456	329
	2022/23	11月	1,499	1,828	238	1,487	341
	2023/24	12月	1,502	1,831	240	1,490	342
米	2020/21		513	701	57	518	183
	2021/22		513	696	54	521	175
	2022/23	11月	518	693	53	525	167
	2023/24	12月	518	693	52	525	168
大豆	2020/21		360	461	154	363	98
	2021/22		374	472	171	370	102
	2022/23	11月	400	501	168	384	117
	2023/24	12月	399	501	170	384	117

世界のとうもろこし需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	11月	299.22	1,220.79	189.87	1,205.03	199.62	314.99
	12月	300.10	1,222.07	191.53	1,206.95	201.46	315.22
アメリカ	11月	34.58	386.97	0.64	314.72	52.71	54.75
	12月	34.58	386.97	0.64	314.72	53.34	54.12
アルゼンチン	11月	1.11	55.00	0.01	14.10	41.00	1.01
	12月	1.11	55.00	0.01	14.10	41.00	1.01
ブラジル	11月	10.27	129.00	1.20	77.50	55.00	7.97
	12月	10.27	129.00	1.20	77.50	55.00	7.97
EU	11月	7.18	59.80	24.50	80.00	4.10	7.38
	12月	7.23	60.10	24.50	80.20	4.20	7.43
日本	11月	1.30	0.01	15.50	15.50	0.00	1.31
	12月	1.30	0.01	15.50	15.50	0.00	1.31
中国	11月	206.04	277.00	23.00	304.00	0.02	202.02
	12月	206.04	277.00	23.00	304.00	0.02	202.02
ロシア	11月	0.91	16.00	0.05	10.90	5.30	0.76
	12月	0.91	17.00	0.05	11.60	5.30	1.06
ウクライナ	11月	2.41	29.50	0.02	5.50	20.00	6.43
	12月	2.80	30.50	0.02	5.50	21.00	6.82

世界の大豆需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	11月	100.31	400.42	165.75	383.68	168.29	114.51
	12月	101.92	398.88	167.65	383.96	170.29	114.21
アメリカ	11月	7.30	112.39	0.82	66.06	47.76	6.68
	12月	7.30	112.39	0.82	66.06	47.76	6.68
アルゼンチン	11月	17.21	48.00	5.70	41.75	4.60	24.56
	12月	17.21	48.00	5.70	41.75	4.60	24.56
ブラジル	11月	33.44	163.00	0.45	59.70	97.50	39.69
	12月	35.35	161.00	0.45	59.70	99.50	37.60
中国	11月	33.79	20.50	100.00	120.50	0.10	33.69
	12月	33.79	20.50	102.00	120.50	0.10	35.69
EU	11月	1.43	3.07	13.80	16.59	0.30	1.40
	12月	1.32	3.07	13.80	16.59	0.30	1.29

世界の小麦需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	11月	269.55	781.98	204.70	792.84	205.01	258.69
	12月	269.85	783.01	206.73	794.66	207.19	258.20
アメリカ	11月	15.83	49.31	3.95	31.43	19.05	18.60
	12月	15.83	49.31	3.95	31.43	19.73	17.92
アルゼンチン	11月	3.93	15.00	0.00	6.55	10.00	2.38
	12月	3.93	15.00	0.00	6.55	10.00	2.38
オーストラリア	11月	3.51	24.50	0.20	7.50	17.50	3.21
	12月	4.37	25.50	0.20	7.50	18.50	4.07
カナダ	11月	3.66	31.00	0.60	8.70	23.00	3.56
	12月	3.64	31.95	0.60	8.70	23.50	4.00
EU	11月	16.52	134.30	7.50	108.50	37.50	12.32
	12月	16.52	134.30	8.50	109.00	37.50	12.82
中国	11月	138.82	137.00	12.00	153.00	0.90	133.92
	12月	138.82	137.00	12.50	153.50	0.90	133.92
インド	11月	9.50	110.55	0.10	108.65	0.50	11.00
	12月	9.50	110.55	0.10	108.65	0.50	11.00
ロシア	11月	14.64	90.00	0.30	43.00	50.00	11.94
	12月	14.64	90.00	0.30	43.00	50.00	11.94
ウクライナ	11月	1.30	22.50	0.08	8.80	12.00	3.08
	12月	1.30	22.50	0.08	8.80	12.50	2.58

脚注1：粗粒穀物はとうもろこし、マイロ、大麦、燕麦、ライ麦等の計で約80%がとうもろこしである。
脚注2：年度は穀物年度。地域・作物により異なる。例：アメリカ産とうもろこし、大豆：9月～8月。

世界主要国の農業と穀物需給の行方…ロシア(3)

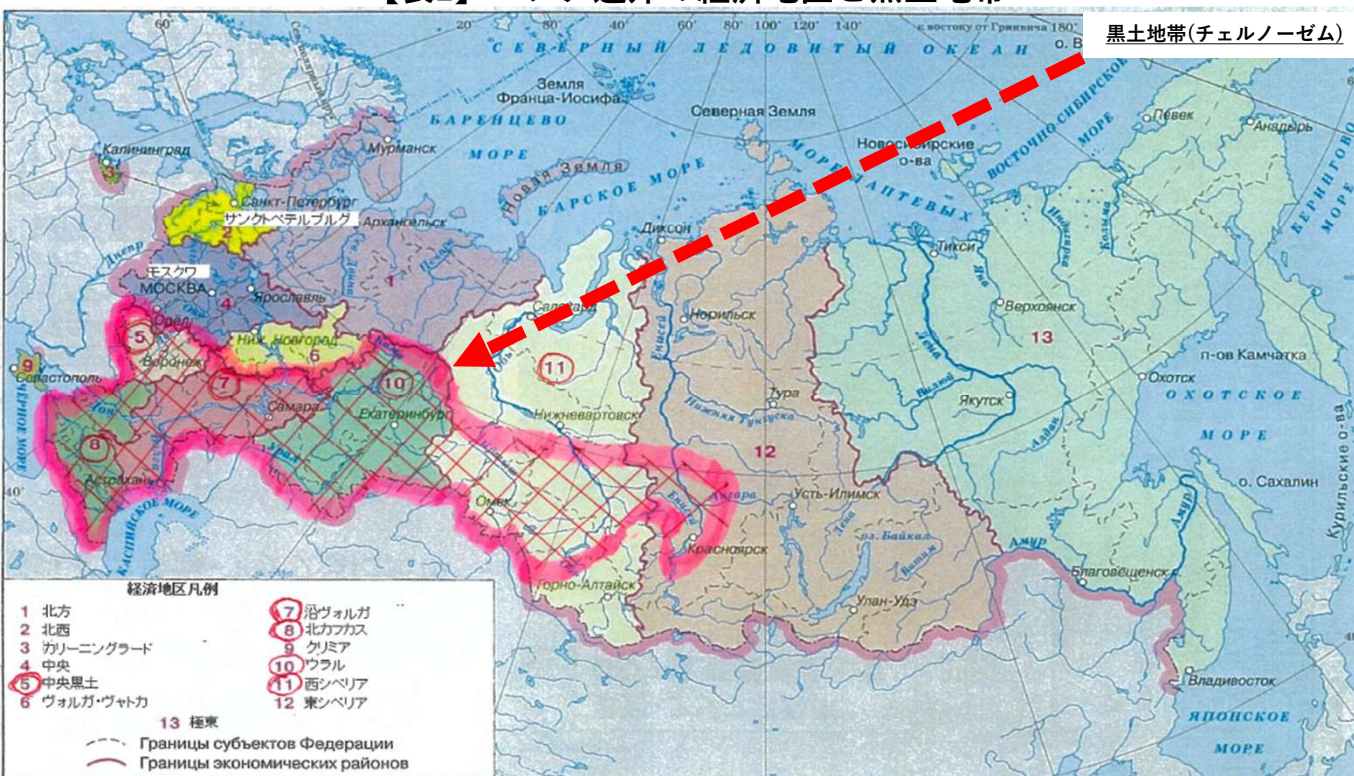
① ソビエト連邦は1991年に崩壊/分裂したが、その多くを継承したロシアの国土面積は世界最大で大きく広い。その領域は北緯50度～同70度、東経30度～同180度。南北3千^キ□/東西6千^キ□。国土面積は約1,700万km²(日本37万平方^キ□の45倍)と世界陸地の約1/9を領有。国土の大半は亜寒帯～寒帯に属し北極海沿岸は永久凍土のツンドラ地帯、カスピ海からモンゴル国境にかけては乾燥少雨のステップ気候地帯と厳しい自然条件下にある。この中でも耕作面積は1.2億ha(日本410万haの約300倍)と広大で米国1.7/インド1.5/中国1.5億haに次ぎ世界第4位。ただ国土面積に対する耕作地比率は国土条件から7.3%と非常に低い。因みに主要国比率は米国18.2%/インド51.6%/中国16.1%/世界平均11.6%となっている。

② いまや世界最大の小麦輸出国となったロシアの穀物生産地帯は、限られた気候/土壌条件の中で一定地域に集中している。添付した[表1]「ロシア連邦の経済地区」は上記のロシア国土の緯度/経度関係を表すと同時に、13地区から成る各地区は気候/土壌等に共通性が有りロシア農業の地域分析には有効である。穀倉地帯は、その中でカザフスタン国境沿いの北緯50～55度線上に帯状に展開している。具体的には黒海とカスピ海に挟まれた地区#8北カフカスとそれに隣接する#7沿ヴォルガ/ #5中央黒土の3地区で2021年 ロシア産小麦79百万トンの67%を生産。更にその東に延びる#10ウラル/ #11西シベリアの2地区を加えれば 9割近い87%と圧倒的なシェアである。この中でも特に黒海/アゾフ海の輸出港を後背地を持つ#8北カフカスは生産量シェア約35%と突出し、中東/アフリカ等への小麦輸出の最前線になっている。

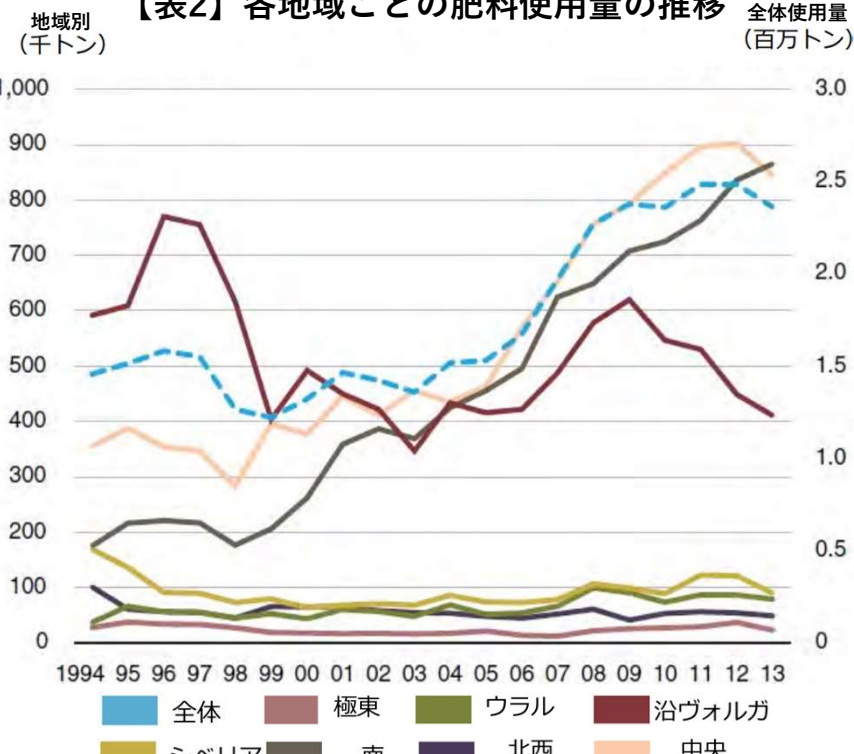
③ USDAの土壌分類体系によると、土壌は肥沃度最高の「チェルノーゼム」(ロシア語でチェルノ=黒/ゼム=土)から最低の永久凍土/砂漠土まで12種類に区分されている(FAO は32分類)。チェルノーゼムは草木の遺骸から作られる腐食層が分厚く堆積したもので、概ね降水量が少なく冷温な地域(ステップ気候帯～湿潤大陸性気候の遷移帯/年間降水量500 mm前後/7-8月平均気温20度以上)で生成される。世界の主な黒土地帯は、①ウクライナ～北緯50～55度前後のロシア平原を西シベリア南部まで東西に貫く地域(所謂チェルノーゼム) ②北アメリカの五大湖周辺からMiss River体系を南北に貫くコーンベルト地帯(プレーリー)、③南アメリカのアルゼンチン/ラプラタ川流域に広がる地域(パンパ)の3カ所が挙げられる。但し②③は降水量1000mm前後/夏場気温も25度前後で温暖湿潤、チェルノーゼムと比べると若干栄養分が流失する傾向がある。

④ ロシアの2010年以降の穀物生産拡大を支えたものは、先月号でも触れた通り ◎生産組織の再編と経営規模拡大 ◎極端なルーブル安 ◎機械化の進展、◎肥料等生産資材の重点投入、◎気候温暖化等が挙げられるがチェルノーゼム地帯に於いてはそれらの要素がより有効的に作用している。[表2]は各地域別肥料使用量の94-13年推移であるが、この間ロシア全体では1.5百万ト→2.5百万トまで約1.7倍増加。地域別には特に穀倉地帯である中央(#4・#5)が40万ト→85万ト、南(#8)20万ト→85万トと急激にその投与量を増大させ沿ヴォルガ(#7)も含め大半の肥料がチェルノーゼム地帯に投入され急激な生産量拡大に直接的に結びついている。一方、耕作が殆ど不適な#13極東/ #12シベリア/ #1北方/ #2北西等の地域への肥料投入量は表では底を這っている。温暖化については具体的統計の確認できないがロシアの08年以降の生産量拡大には間違いなく寄与しているものと想定される。(続く)

【表1】ロシア連邦の経済地区と黒土地帯



【表2】各地域ごとの肥料使用量の推移



出所：ロシア連邦統計局